

【学会報告】

2014 日韓シンポジウム及び韓国基礎老化学会に参加して

岩下 雄二、丸山 光生

国立長寿医療研究センター研究所・老化機構研究部

2014年6月19日から21日にかけて、韓国のチェジュ島で行われた2014日韓シンポジウム及び韓国基礎老化学会に参加したので、報告する。この日韓シンポジウムは、日本基礎老化学会と韓国基礎老化学会が、これまでも毎年合同で開催しており、一年ごとに、お互いの基礎老化学会の年會に招待し合って、研究発表を行い、交流を深めてきた歴史がある。今回、日本からは、石井 直明理事長を始め、その他2名のベテラン(?)理事を含めた全10名で参加し、9題の口頭発表を行った。会場のヌーガビレッジには、会議場の他にリゾートペンションが立ち並び、韓国から集まった参加者は、おそらく全員がそこに宿泊して、まさに合宿形式の学会となっていたようだ。口頭発表32題、ポスター発表44題が、分子生物学のみならず、神経科学、生理学、栄養学、代謝学や生体防御学など、幅広い分野にわたって老化研究を融合する形で発表されていた。

最初に印象的だったのは、大学院生やポストドクと思われる若い韓国人研究者の多さだ。話を聞いてみると、研究室単位でペンションに宿泊するほどの人数で参加しているケースもあるようで、研究室のほぼ全ての大学院生が参加するほどの規模だったのかもしれない。また、発表内容に対する議論も活発に行われ、なかでも、招待講演者であったUniversity of Texas Health Science CenterのByung Pal Yu博士の、発表者の研究がより発展するような示唆を与える質疑応答のあり方に、大きな感銘を受けた。学会期間中は、食事やレクリエーションの時間を通して、多くの韓国人研究者と交流することができた。それぞれの大学の学部長を務めるようなPIでも、とても気さくに話してくれる人が多かった。

2日目のランチでは、韓国側のオーガナイザーの配慮で、2人の韓国の若手研究者のテーブルに案内された。彼らはそれぞれ、線虫とショウジョウバエを使った老化研究者であり、私と同じく3日目に口頭発表をするとのことだった。お互いの研究内容の話をするうちに、今後の研究の方向性の話になり、独立したか、今後、独立して自分の研究室を率いようとしている彼らにとって、老化研究に小型モデル生物を使うことは研究コストを抑えられる利点がある一方で、ヒトや哺乳動物で見られる老化現象との対比や、自分たちの発見の生理的意義の主張に苦勞する点など、短い時間ではあったが、大変興味深い話が聞けた。実際に彼らの発表を聞いてみると、それぞれのモデル生物の利点を生かした、新しい老化の指標の測定方法の開発に取り組む、意欲的な研究内容であり、大きな刺激となった。

また、一緒に参加した日本人研究者とも、通常の学会よりも長い時間一緒にいることもあり、それぞれの口頭発表の内容を超えて、今後の老化研究の動向などについても、普段、聞けない話をたくさん聞くことができ、とても有意義であった。私自身は、今回、初めて参加させてもらったが、基礎老化研究という枠組みが、実際には多様な学術分野の集合体からなっていることを、改めて感じた。多様な分野があるということは、老化を掲げて研究を進めていくうえで、少なくとも自分にとっては未知の学問分野に踏み出していく機会が多くなることを意味し、韓国と日本の双方で、困ったときに気軽に物を聞ける知り合いを増やせたことは、私にとって、この日韓シンポジウムに参加して得た最も大きな財産になったと思う。



2014 日韓シンポジウムおよび韓国基礎老化学会の様子
(左) 会場のヌーガビレッジの会議場 (右) 日本基礎老化学会からの参加者と韓国のオーガナイザー達